

芸術の秋に思う地域間交流

北陸・金沢で暮らし、四季折々の素敵な風景や経験を本欄に書き続ける一方、筆者は故郷・東京(出生した杉並区荻窪界隈)のことは存外、分かっていないことに最近、気付かされる。

「土地の人は自分の生れ育ったところにはウカツでいて」と、日本各地を巡った岡本太郎画伯は地元の良さに気が付かない人々の様子を指摘した。故郷に帰るのは身内の法事程度、自分も「ウカツ者」と言えようか。

今年、生誕 120 年を迎えた世界的版画家・棟方志功画伯の展覧会が杉並区立郷土博物館で開催されていた(生誕 120 年 棟方志功 暮らしの中の^{びいごう}芸業)。昭和 26 年から終生暮らした荻窪の家のこと、市井の人々との交流から生まれた親しみある名店の包装紙まで、多数の作品を後世に残されたことなど、わずかな知識はあった。しかしながら、「富山では、大きないただきものを致しました」と述懐した「成熟の地」富山県南砺市福光での創作活動の後に、多くの支援を得て荻窪に転居したこと(賛助者に、かつての日銀金沢支店長と縁の方もみえる)、ベネチア・ビエンナーレで国際的な名声を確固たるものにした作品、「柳緑花紅頰^{りゅうりよくかこうしょう}」は杉並区の中学校への寄贈作品であったことなど、先達の偉業や地域とのつながりには新たな発見が多い。地元に興味を持ち、学ぶ人が増えることは、地域間の交流人口を創出する大きな力になると実感した。

東京の街並みは、都市と地域それぞれの「密度の経済性」を考える契機にもなった。輸出ができない小売・サービス業など、「生産と消費が同一の場所で、同時に行われる産業」では、人口密度の高さに応じて労働生産性(一人当たりの付加価値額)が高まる。新型コロナウイルス感染症の拡大局面では、社会的な「密」は、避けるべきものとされた。だが、経済的な観点からは、人口密度の高さは、北陸の域内総生産の 7 割弱を占める第 3 次産業の効率性(事業者の観点からは魅力あるマーケットに映り、利用者にとっては便利)、ひいては、産業の担い手となる若者を呼び込み、都市機能の持続性を高める土壌になる。従って、感染症対策との両立が重要だ。

都内の主な街では、ご存じのとおり、徒歩圏内、または公共交通機関による短時間での移動圏内に商業施設や公共施設などが多数立地し、利便性が高いだけでなく、高齢化社会の目線でも、医療機関や寺院など、出産から終活まで、全てのライフステージをカバーする体制が狭域に整備されている。地域の街づくりにおいて、特に、人口密度が高くない県庁所在地以外の街の今後のあり方を考える上で、「密度の経済性」は大切な視点になる。

石川県では、第 38 回国民文化祭「いしかわ百万石文化祭 2023」の開催が街の美質を高める。「芸術の秋」を迎え、文化を起点とした地域間交流、少子高齢化の下での持続的な地域経済の発展のあり方について、思うことを記してみた。